

# 私のおすすめ

## 作家 プロコフィエフ

斎藤 桃

図書

ロシアによるウクライナ侵攻から2年半が過ぎようとしています。今回ご紹介するのは、ロシア帝国領ソツォフカ（現在はウクライナのСонцівка）生まれの作曲家、セルゲイ・プロコフィエフ（1891-1953）による著作です。プロコフィエフと聞いて、皆さんが最初に思い浮かべるのはバレエ《ロミオとジュリエット》、または《ピーターと狼》でしょうか。いずれも機知に富んだ響きやチャーミングな旋律がふんだんに用いられ、発表当時から今日まで観客に愛され続けている名作です。

そんなプロコフィエフには、他にもたくさんの才能がありました。チェスを好んだことはよく知られていますし、物書きとしての側面も彼の大切な一面と言えます。そこで、作曲家自身による11の短編が収録された『プロコフィエフ短編集』を、「私のおすすめ」としてご紹介します。

これらの短編小説は20代の若きプロコフィエフによって書かれたもので、米国移住前に滞在した日本での著作も含まれています。私たちは普段、音を通して作曲家の世界に触れますが、言葉を通して「プロコフィエフらしさ」がはっきりと感じられることには不思議な感動を覚えます。中でも一番のおすすめは、5歳

さいともも(大学院 音楽研究科 博士後期課程 器楽研究(ピアノ)1年) ● 一度ボルダリングをやってみたいと思っています。ピアノで鍛えた指は通用する…?

の女の子が主人公の「毒キノコのお話」です。20代後半でも子どもの眼差しを失わない彼の瑞々しい感性は、のちの《ピーターと狼》の創作への道を示すようです。

日本語翻訳書であるこの本には、短編小説に加え、作曲家の日本滞在日記が収録されていることも魅力の一つです。日記では、1917年のロシア革命に伴う内乱を避け、米国への移住を目指す旅の経由地、日本での約2か月間の日々が、彼自身によって赤裸々に語られています。決して順調でない旅に不安をにじませながらも、銀座、横浜、京都など赴く場所々々で、その風景や文化に感嘆するさまは、日本に住む私たちの旅情をもかきたてます。

まもなく夏休みです。およそ100年前の夏、日本を巡ったプロコフィエフに想いを馳せつつ、旅に出るのはいかがですか。



『プロコフィエフ短編集』  
セルゲイ・プロコフィエフ著；  
サブリーナ・エレオノーラ、  
豊田菜穂子訳 群像社  
2009  
(群像社ライブラリー；22).  
請求番号●J116-512

## 自分の中にある弱さと向き合う

矢野瑞希

図書

私は本を読むことが好きだ。というよりも、登場人物に自分を重ね、物語の中に溶け込んでいくような感覚が好きだという方が正しいのかもしれない。特に音楽がテーマになっている物語は、自分がまさに感じたことのある演奏に対する感覚や、逆に演奏をしていて言葉では上手く表せなかった感覚を教えてくれることもあり、つい自分に重ね合わせ、夢中になって読んでしまうことが多い。そんな数ある音楽小説の中で今回紹介する『ラプカは静かに弓を持つ』は、2017年から2022年まで実際に行われていた音楽教室著作権裁判をモデルに書かれた作品だ。

全日本音楽著作権連盟、通称「全著連」の一員である橘に、ある日上司から予期しない命令が下される。それは音楽教室がレッスンの際に演奏権を侵害していることを法廷で証言するために潜入調査をせよという内容だった。ある事件をきっかけに音楽に対してトラウマを抱え、チェロを演奏することから離れていた橘は、不安を抱えつつ音楽教室に通うことになる。音楽教室で出会った先生と仲間の存在が、少しずつ音楽のトラウマを溶かし、音楽の楽しさに再び触れていく。それと共に刻一刻と裁判の証言台に立つ時が近づいてくる。

この本を読み進めれば読み進めるほど、心に刺さるような感覚になった。その理由の一つは橘の人間らしさなのではないかと思う。潜入調査がばれないように嘘をつき、人との関係にも音楽にもどこか壁を作り、しかし仲間が出来ることによって嘘がばれたら軽蔑されてしまうのではないかと思悩む、まさに人間の心の弱い部分がしっかりと描かれているところに強く共感してしまうのだ。そして、弱い部分が合ったからこそ出来た演奏場面に、音楽は良い部分も弱い部分も、全てを力にして表現することが出来るんだと実感した。

誰でも音楽を学んでいるうちにどこかで壁にぶつかったことがあると思う。自分の演奏に納得が出来ずに悩んだり、自分の音楽家としての将来について不安を感じたり…。そんな自分の隠したい部分にも登場人物を通じて共感し、最後までどうか目を背けずに読んでほしい。



『ラプカは静かに弓を持つ』  
安壇美緒著 集英社 2022  
請求番号●音楽小説 ||ADA  
(資料 ID : J140169)

やの みずき(図書館臨時職員) ● 夏になると、昭和記念公園の花火大会を祭の屋上に集まってみんなで見ていた日々を思い出します。